

竹下政孝 2002 「マートゥリーデー」「マートゥリーデー学派」大塚和夫・小杉泰・小松久夫・東長靖・羽田正・山内昌之(編)『岩波イスラーム辞典』岩波書店。

ナイ ジュニア, ジョセフ・S. 2002 『国際紛争——理論と歴史』(田中明彦・村田晃嗣訳) 有斐閣。

ロールズ, ジョン 2010 『正義論』(川本隆史・福岡聡・神島裕子訳) 紀伊国屋書店。

Soest, Christian von and Julia Grauvogal. 2016. “Comparing Legitimation Strategies in Post-Soviet Countries,” in Martin Brusis, Joachim Ahrens and Martin Schulze Wessel (eds.). *Politics and Legitimacy in Post-Soviet Eurasia*, Hampshire: Palgrave Macmillan, pp. 18–41.

(市川 太郎 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Anna M. Gade. 2019. *Muslim Environmentalisms: Religious and Social Foundations*. New York: Columbia University Press. xii+324 pp.

地球環境問題が国際的な社会問題として表面化してから半世紀が経つ。迫りくる環境危機に対し、人文・社会科学の側からも様々な理論的枠組みが構築され、学際的な取り組みがなされてきた。なかでも環境学とイスラーム学を結合したアプローチは最も新しいものの1つであり、近年発展が著しい。

イスラーム世界の人びとが現代の環境問題に関心であるかということ、そうではない。むしろサイド・ホセイン・ナスルのような哲学者や、彼の影響を受けた研究者やイスラーム法学者は、主に欧米で構築された環境主義 (environmentalism, 人間と環境とのかかわり方において生じた変化に対する人間からの応答を指し、思想から行動まで広く含まれる) の議論にイスラームを基にした解釈を組み合わせることで、イスラーム的な環境主義の思想・理論を構築してきた。本書はこれまでの議論を継承しつつ、新たなアプローチからイスラーム世界における多様な環境主義が持つ思想と実践を捉え直し、ムスリム独自の環境との関係性の実像により迫った貴重な労作である。

著者は本書を通じてイスラーム学と環境学の分析枠組みを拡大することで、ムスリムにとっての環境という概念が、グローバル化のなかで生きるムスリムが実際に認識するかたちで、人文学的に理解されることを促している。著者は10年以上にわたるフィールドワークを基にした民族誌的手法、そして聖典やイスラーム法、現地語の文献や史料、グローバル化のなかで流布する環境思想など幅広い研究資料を対象にした解釈学的手法を用いている。

2004年から2019年にかけて著者が残してきた論文や講義の集大成である本書は、分野横断的な研究により、イスラーム学と環境人文学の新たな地平を切り開くだけでなく、宗教学や東南アジア地域研究、文化人類学、歴史学など多岐にわたる分野に有益な情報と視座を提供している。

なお、著者はシカゴ大学で宗教史の博士号を取得したのち、主に東南アジアにおけるイスラーム教育に関する研究を行う一方で、英語の『クルアーン』読解入門書複数冊の分担執筆者としても業績を残してきた。2004年から著者は宗教と開発を扱うテーマに取り組んできたが、2014年に米国のウイスコンシン・マディソン大学ゲイロード・ネルソン環境学研究所に所属して以来、本書に代表されるような宗教史に環境学を組み合わせた研究に重心を移している。著者は2021年現在も特別荣誉教授として本研究所に所属している。

本書は全7章で構成されており、全体の章立ては以下の通りである。

- 第1章 宗教史、イスラーム、環境人文学
- 第2章 イスラームと環境——多元主義と開発
- 第3章 『クルアーン』からみた環境——生物と資源に関して
- 第4章 イスラーム的な環境正義、法、倫理の根と枝
- 第5章 イスラーム人文学——シンボル、表現、自然科学を捉える
- 第6章 宗教的实践としてのムスリム環境主義——見えざるものの評価

第7章 この世界から次の世界へ

第1章は導入として本書の狙いや問題背景、分析手法を紹介したうえで、「ムスリム環境主義 (Muslim environmentalism)」という分析枠組みを提示する。これは過去から現在までのムスリムによる環境への多様な倫理的・知的な働きかけを参照し、それらによって形成されてきた環境概念の系譜をたどるアプローチであり、これにより彼らが認識する「環境」の本来の姿を明らかにしていく。このアプローチは「イスラームと環境 (Islam and the environment)」という名の研究分野 (後述) で主に採用されてきたものとは異なり、環境人文学とイスラーム理解の脱植民地化のために望ましいと著者は主張する。

第2章では主に欧米と東南アジアのNGOがイスラーム的な言説と環境問題とを結び付けて、プロジェクトに人びとを取り込む過程を人類学とポストコロニアル理論の観点から分析している。本章で鍵となるのが「世界宗教」と「開発」という言説である。持続可能性のために世界中の宗教が一つになって環境問題に取り組むべきであるという、国際会議などで喧伝される一見華々しい普遍主義的理念と、環境保護のための国際協力や国家を通じた開発計画に人びとを従属させるための手段としてイスラームの用語や規範を利用する開発主義のあり方を著者は批判的に検討している。本章の最後では、東南アジアでの環境教育の現場から、現地で形成された内発的なムスリム環境主義と開発的文脈にイスラームを当てはめた外部からのムスリム環境主義が重なり合う事例を紹介している。

第3章は、従来のイスラームと環境に基づく理論が『クルアーン』の章句に大いに依存するにもかかわらず、『クルアーン』の権威が社会的・歴史的に、テキスト上でどれだけ引き合いに出され、適用されてきたかが十分に検討されていないという問題意識のもと、環境に関するクルアーンの章句や古典的資料に着目し、そこで引用される用語を説明する。本章の後半では、主にインドネシアのムスリム環境主義者による聖典の解釈を例に挙げ、クルアーンから導き出される様々なムスリム環境主義に通底する原理的信条を明らかにする。

第4章ではイスラーム法の法源と法規定に着目し、環境に関する規定を定める際に、イスラーム法学者がどのような類推の手続きを踏み、実際の問題に適用しているのか紹介している。本章では、雨乞いの儀式においてイスラーム法が手引きとして機能する様子や、現代インドネシアにおいてインドネシア・ウラマー評議会が発布した廃棄物管理に関するファトワが、個人や行政に影響を与える様子が記述されている。そのうえで著者はイスラームによる法的・倫理的な規範が、個人と集団に対して、全体的かつ個別具体的な手引きを示し、自律的かつ一貫した規定枠組みを提示すると評価している。終いに、ムスリム環境主義者は過去から未来に至るまですべての人間と非人間との関係を、イスラームの法と倫理を通じて説明できると結論づける (p.155)。したがって、環境正義や自然の権利のような現代的テーマに対しても、英語圏で生まれた理論がなくとも『クルアーン』などから導かれる法・倫理の理論は一貫した説明と様々な解釈・応答を可能にするという。

第5章は古典的文献や芸術で描かれる象徴や比喩、寓話とイスラーム科学の関係性を考察する。著者はまず、中世イスラーム世界におけるイスラーム科学に焦点を当て、イスラームにおいて環境倫理と科学とが不可分の関係にあったことを指摘する。『クルアーン』に度々描かれる水や動物は、資源や現象として自然科学の分析対象になるだけでなく、自然界における神の慈悲や力を示す「徴」としてあらわされ、双方の視点がその環境における現実として語られる。それにより、自然現象の理解は、道徳的な見方と経験主義的な見方を不可分にした論理のうえで成される。本章では、インドネシアの自然保護区「ハリム」を通じた環境教育における、自然科学的な説明とイスラームの描写による概念的な説明とを合わせた教育事例が紹介されている。

第6章で著者は、環境的な取り組みが信仰の一端をなすことを主張する。言い換えると、イスラームの宗教的实践は自然環境へ配慮した行為に本性的に結びつくということである。ここではインドネシアにおける現地調査で見られた、エコ・ズィクルやエコ・サラートの実践 (通常の礼拝や読誦に加え、宗教指導者キヤイによる環境に関する説教や儀式が行われる) を例にあげて、宗教的实践と環境的取り組みの混合を説明する。最後に著者は環境人文学の存在意義を振り返る。これまで環境人文学のなかでイスラーム世界から自発的に顕現する環境主義は軽視・無視されてきた。著者によると、これは欧米側が抱えてきたイスラーム世界

に対する固定的な認識と、何を「環境」に含めるかという前提の欧米的視点への偏りに由来するという。

最終章である第7章では以上の6つの章を総括したうえで、発展途上である環境人文学という学問を構築・批判するなかで本書のムスリム環境主義という見方が果たした役割を改めて提示し、本書を締めくくっている。

以上、各章の概要を整理した。本書の最大の意義は、イスラームと環境の理解の脱植民地化である。著者は「ムスリム環境主義」という新しい分析枠組みを用いることで、イスラームと環境問題を組み合わせるこれまでの研究者が陥っていた英語圏中心主義に果敢に挑んでいる。そして、現地語資料とフィールドワークをもとに築き上げた新しい分析枠組みによる本書の研究は、環境という用語の捉え方について重要な視座を与える。

著者が「イスラームと環境」と呼ぶ従来の研究分野では、イスラームの法や倫理を環境保護に有用な形で再解釈する研究 [Izzi-Dien 2000; Llewellyn 2003] が多い。著者いわく、「イスラームと環境」分野のなかで取られたアプローチは、「イスラームと X」と名付けられた他の研究分野 (Xには「ジェンダー」や「生命倫理」などが入る) のように、欧米で定義された用語をそのままの形でイスラーム世界に当てはめる植民地主義的行為に等しい (p. 14)。なぜなら環境という概念が、これは守るべきもので、人類共通で問題解決すべきものだという前提のままイスラーム世界に伝播し、一方でイスラーム的な環境論を作ろうとする研究者はその意味を自問せずに環境という目的のためにイスラームの言説を分解し、再構築していたからである。イスラームと現代の環境問題を結び付けたバイオニヤ的存在であるサイイド・ホセイン・ナスルや、ナスルの影響を受け、イスラーム的な環境倫理や環境法を提案した研究者でさえも、環境という用語は所与のものとしてきた。結果として、環境という言葉の意味は固定化ないし矮小化され、理想論のようなイスラーム的環境論が独り歩きし、最終的にイスラーム世界各地で生活するムスリム個人の感覚的な経験は理論のなかに十分に組み込まれずにいたのである。

これに対し、本書の「ムスリム環境主義」アプローチでは、「環境」を倫理的なものと定義し、動的な環境主義によって形作られるものだとする。環境の概念は主体間の関わり合いによって変化するものなので、文脈によって人間の責任や立場も変化し続ける。そうした機微な変化を余すことなく描写するためにも、著者は環境の変化に対するムスリムの応答行為から議論を積み上げていく。環境を過剰に取り沙汰せず、人間が持つ複数の価値観を相対的に扱う、こうした存在論的な人間と環境の関係の捉え方は今日の人類学や環境学で多くみられるが、本書はインドネシアにおけるムスリムの環境に対する行為を民族誌的に追うだけでなく、行為を感覚的・思想的に裏付けるイスラーム世界のメタ地域的な要素 (アラビア語の古典や「ハリーム」のインドネシアでの適用など) にまで分析の対象を広げた点で意義深い。

これにより、本書はムスリムの環境に対するイスラームに基づいた対応、及びその動機付けの多様性を描くことに成功している。具体的には水に関して、イスラーム法は、資源としての水の管理法や管理のためのワクフのあり方を規定し、同時に、神の恐れや恵み、人間のパートナーなどとして、水を象徴的に理解するヒントを与える。これらはすべて、イスラーム法学者や環境主義者によって、在地の文脈に合わせつつ柔軟に解釈され、資源利用の制度形成や水の節約、美化、教育のために利用される。このように、ムスリムが持つ環境主義の多様性を個人・団体レベルから追っていくことは、より現実に即したイスラーム的環境認識を知ることに繋がるといえる。

最後に、本書が残した課題について付言したい。著者は、本書で描かれたムスリムの環境主義の多様性をもとに、イスラーム世界における多元的な環境倫理を解明できることを主張する。とはいえ、ムスリムが持つ環境倫理の「多元性」の意義をより深く理解するためには、ムスリムの多様な環境主義が果たす役割を、イスラームの枠組みを超えて分析される必要があるだろう。本書においては、ムスリム環境主義者が主役とはいえ、環境認識が形成され行動に移される背景の社会的・経済的要素に関する記述が避けられていたが、この空白にムスリム環境主義アプローチを活かすにはどうすればよいだろうか。

第1に、本書で取り上げられた東南アジアの NGO や環境団体の事例は水や動物、木、農地、自然保護区など非常に広範であるが、調査段階でそれぞれがある程度確立された理念・アドボカシーをもって活動している。しかし、環境の価値が多元的で、動的であるというならば、ムスリム環境主義者内部でもその道徳

的価値が取れんしたり分離したりするはずである。価値の離合集散が顕著に表れるのは公共的空間における論争や利害対立、ネットワークのなかにおいてだろう。そうした空間を分析してきた学問分野として環境社会学などがあるが、ここにムスリム環境主義アプローチを応用して加えることで、非ムスリムとムスリムを同じ土壌で相互参照した見方を提供できるのではないだろうか。

第2に、地域や活動内容によって、優先される法や慣習は異なるし、イスラームの法源やテキストが存在するにもかかわらず、それが意識されていないものも存在する。例えばイスラーム法と部族慣習を利用した牧草地の資源管理制度である「ヒマー」やハリームに関して、概ね同様の制度なのに別名がつけられる場合が地域や時代によってみられる[縄田 2009: 289]。また、在来地を活用した自然保護活動において、類似の他制度よりもヒマーを優先して導入する現象も起きている。このとき、なぜイスラーム的な要素がある特定の活動に結びつく必要があるのか、という制度的な背景の説明が求められる。ムスリム環境主義者の活動圏や活動内容は、必ずしもイスラーム的な理念や思想によってのみ規定されるわけではないため、説明の対象をテーマや団体で固定するとムスリムの環境主義の機能とそうでないもの見分けが付きやすくなるのではないだろうか。

環境倫理の多元性の意義を真に理解するため、宗教を超えた環境倫理の動態性と、関係する制度の観点からムスリム環境主義アプローチの展開の可能性を述べてきたが、まさに環境人文学や地域研究のような学際的なアプローチがより一層重要になってくることがわかる。ただしその際には、イスラームの枠組みのなかだけではなく、加えて在地の慣習や法、自然観、地理的条件といった複眼的な視座からイスラーム的なものの役割を検討する必要がある。そうすることで、イスラーム世界の環境倫理を多元的に理解する意義がより深まるだろう。イスラームと環境を扱う研究には「イスラーム環境学」と呼べるほど方法論的特色のある理論や実証は蓄積されていない。実に壮大で長い道のりかもしれないが、今後の展開に期待したい。

<参考文献>

縄田浩志 2009 「アラビア半島のジャクシン林の利用と保全」池谷和信(編著)『地球環境史からの問い——ヒトと自然の共生とは何か』岩波書店, pp.271–294.

Izzi-Dien, M. 2000. *The Environmental Dimensions of Islam*. Cambridge: Lutterworth Press.

Llewellyn, O. 2003. “The Basis for a Discipline of Islamic Environmental Law,” in R. C. Foltz, F. M. Denny and A. Baharuddin (eds.), *Islam and Ecology: A Bestowed Trust*. Cambridge: Harvard University Press, pp. 185–247.

(中鉢 夏輝 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

Harris Irfan. 2015. *Heaven's Bankers: Inside the Hidden World of Islamic Finance*. New York: The Overlook Press. xx+347 pp.

本書が表している内容は、イスラーム金融の発展史ということができるだろう。黎明期、静かに成長していたイスラーム金融業界は、過去20年の間に爆発的な成長を遂げ、欧米諸国のイスラモフォビアの高まりと相反するように、評価が高まっている。もっとも、その爆発的な成長は、裏を返せば法学的に疑問の余地のあり、イスラーム金融としての既存の金融からの独立性を脅かすものなのであるが。

著者であるハリス・イルファーンは、ドイツ銀行のイスラーム金融部門のCEOを務めていたこともあり、こうした拡張の実情とその流れを、イスラーム法の遵守という視点に肩入れすることなく、時に内側からの視点で持って追いかけている。

本書の全体の流れは、イスラーム金融の中でこれまで行われてきた画期的かつ大型な取引や金融商品の作成を取り扱いながら、イスラーム金融の開発史を追いかけているものである。であるからして、本書は金融商品自体の分析をした仕様書でなければ、イスラーム金融の教科書と呼べるようなものではない。おそらく、そういったものや、本誌の他の欄で紹介されている学術論文や研究書よりも、エッジ(事件や英雄譚で